

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			社会学研究科	社会学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程4年		野尻洋平 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	社会学部・教授		成田康昭 印		
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会		個人・共同の別	個人 ・ 共同 1名	
研究課題名	D.ライアンの社会理論——「監視の両義性」テーゼにかんする理論的考察				
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程4年		野尻洋平		
研究期間	2010 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、監視社会論の代表的論者であるデイヴィッド・ライアン (David Lyon) の理論と方法について、その射程と限界を社会学的に明らかにすることである。監視社会にかんする先行研究において、かならずといってよいほど言及され、議論の土台を築いたとされているのが、上述のライアンである。本研究では、ライアンの監視社会論について、その中心的なテーゼである「監視の両義性」に焦点をあてて検討をおこなっていく。このような現代社会における学際的なトピックについて基礎的な研究をおこなうことは、社会的また学術的に大きな意義をもつと考えられる。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[監視社会] [D.ライアン] [コミュニケーション]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**問題の所在**

本研究が対象とする「監視社会論」のパーспекティヴは非常に広い。ライアンはその主著『監視社会』のなかで、現代において監視とかかわらずに日常生活を送ることは不可能であると述べる。日本の社会では、たとえば、朝起きて一步外に出ると、マンションでは監視カメラが作動し、道路や交差点では N システムが自動車をモニターしている。職場では入口で ID カードをチェックされ、社員は送受信するメールを特殊なソフトでモニタリングされている。帰宅時に買い物をすれば、ポイントカードやクレジットカードに購入履歴が記録され、自宅でネットサーフィンをすればそのアクセスログが訪れたウェブサイトにも蓄積されていく。さらに、子どもが外出するとなれば GPS 機能付きの携帯電話をもたせることも、いまではめずらしいことではない。

社会の監視化／監視の社会化についての問題関心や意識は、住基ネットの施行や、テロ対策・治安対策の名目で街頭に設置される監視カメラの増加を社会的背景としながら、社会学や社会科学のみならず、新聞などのジャーナリズムにおいても、賛否やその思想的意味を問う多くの議論を巻き起こし、多くの研究を生み出してきた。海外においてもまた、英米を中心に議論が盛んにおこなわれている。日本学術協力財団『学術の動向』(2008年11月)に掲載された遠藤薫の論文「リスク社会と監視社会—安心・安全のパラドックス」は、社会の監視化／監視の社会化という問題が、筆者が専門とする社会学という特定の個別科学を超えて、ひろく人文・社会科学全般にわたって現在もっとも旬なトピックのひとつであることを示している。

先行研究

本研究が対象とする「監視社会論」という学問分野及びその研究領域では、社会の監視化について、つぎのような議論がおこなわれている。すなわち、自身の議論の主要な構成要素の一部として監視を組み込むことで独自の現代社会論を展開するもの(東浩紀 2002-2003「情報自由論」; 鈴木謙介 2005a, 2005b「監視社会とカーニヴァル化論」)、個別具体的な専門領域において監視を問題化するもの(松田美佐 2004「カメラ付きケータイと監視」; 李 2006「職場における監視」; 阿部・成実編 2006「空間管理社会論」)、聴き取り調査や統計的手法をもちいて人々のセキュリティ意識のあり様を記述し説明するもの(伊藤 2005; 朝田 2006, 2007)、社会哲学・法哲学などの思想的な水準で社会の監視化を論じるもの(東・大澤 2003; 岡本 2005; 大屋 2004, 2007「ポストモダンとセキュリティ」)、さらには建築学的な視点から論じるもの(五十嵐 2004, 2006)などが挙げられる。さらに国外では、以上のような論点のほかに、メディア文化論的な視点から論じられているものもあり、これらは *Surveillance Studies Reader* のような書籍で概要が論じられている (Sean Hier, Joshua Greenberg, ed. 2007)。

これらの研究のパーспекティヴを切り開いたのは D.ライアンであるが、かれの議論を内在的な観点から理論的な検討をくわえた研究は存在しないため、当該研究領域において本研究が果たす意義は大きなものであると考えることができる。

研究成果の概要 つづき

D. ライアンの監視社会論

監視社会論は、1990 年前後からおもに欧米において展開しはじめた現代社会論である。監視社会 (surveillance society) という用語が初めて使われたのは 1985 年の G.マルクスによる著作だと言われている。日本では、2002 年に D.ライアンの『監視社会』(Lyon 2001=2002) が邦訳されて以来、その議論が一般に認知されたといえる。あらためて述べるまでもなく、ライアンは監視社会論の代表的な論者であるが、かれがどのような問題意識からいかなる理論的背景のもとで現代を監視社会として捉えたのかについてはあまり知られてない。野尻の整理 (野尻 2009) によれば、ライアンは 1970 年代に自身の理論的な立場をキリスト教社会学 (Christian Sociology) として定位し、世俗化論の批判的研究を経て、D.ベルの脱工業社会論の批判的検討などを主軸とした情報社会論に以降し、ポストモダニティなどの理論的な研究などを交えながら、1980 年代末頃から監視社会研究へと着手している。監視社会にかんする著作を精読すると、初期ライアンのキリスト教社会学的な視点がひっそりと息づいていることに気づく。すなわち、特殊西欧的な解釈と批判が、かれの議論には存在するのである (野尻 2009)。

ライアンのキリスト教的社会思想と「監視の両義性」

ライアンによれば、監視にたいする批判的な理論は「生身の人間についての、完全な知覚という文化的な強迫観念についての、そして監視の政治学を導く倫理についての、首尾一貫した見解から与えられなければならない」(Lyon 2001: 124)。それはつぎのような規範的な原理を出発点とする。

人間は本質的に社会的である。したがって、コミュニケーションは不可欠である。

ここにはふたつの含意がある。第一に、コミュニケーションの倫理において、対面性の概念が特権視されなければならない。……第二に、他者への配慮は人間性に由来する根源的な要求である。(Lyon 2001: 125)

第一の含意から導出されるのは「人間の再身体化 (re-embodiment persons)」という論点であり (Lyon 2001: 151)、第二の含意から導出されるのが「他者への配慮 (care for the Other)」という論点である (Lyon 2001: 153)。ここで示されているのは、キリスト教的な規範的価値をまとった人間像であり、それはライアンの倫理的姿勢、また価値的立場 (Lyon 2001: 151) として考えることができる。

監視研究の第一作目の著書である *The Electronic Eye* では、ライアンは自身の監視批判への姿勢について、その導きとしてアウグスティヌスの『神の国』に言及し「人間性というものは、アウグスティヌスによって非難され、そして、今日プライバシーにかんする言説においてよくささやかれるような、自己所有の個人主義としてではなく、連帯や尊厳、そして責任に重きを置く<神の似姿 (the imago dei)>として理解される」と述べている (Lyon 1994: 222)。ライアンはまた、『監視社会』の注において「神学的には、社会的存在としての人間 (persons-as-social) という概念は、三位一体 (Trinity) の教義に起源をもつ。イマーゴ・デイ、すなわち神の似姿としての人間には、その源泉が有する、本質的に社会的な性格が反映している」(Lyon 2001: 173) として、キリスト教神学的な水脈を引き込み、議論の補強をはかっている。

これらの記述を考慮するならば、ライアンの監視社会のオルタナティブとして提出されている「人間の再身体化」と「他者への配慮」というふたつの論点は、三位一体論などを背景としたキリスト教思想に基づいていると考えることができる。パノプティコンにたいして『詩篇』139 編の含意から「管理」のみならず「配慮」としての側面をも読み込んでいく理論的解釈とは、ディストピアとしてのパノプティコンそれ自体をポジティブに捉え返すことによって、監視社会にたいするオルタナティブを引き出そうという試みの裏書きであったといえるだろう。そのような理論的解釈は、監視社会の記述理論であるとともに、規範的な社会理論として、ライアンの議論の背景に存在しているのである。

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1. 雑誌論文

野尻洋平, 2011.3, 「監視社会における近代的個人をめぐる構図——D.ライアンの『キリスト教的な人格』を中心に」『応用社会学研究』立教大学社会学部, 53: 187-197.